



現代日本画の最高峰、広島に集結!!

回生回生會展

日本画の伝統と未来へ

展覧

exhibition of Sei sei kai

下田義寛／竹内浩一／田淵俊夫／牧進
開会式情報、主要作品解説を追加しました！(3/25更新)

会 期:平成26(2014)年4月17日(木)～5月25日(日) 会期中無休

開館時間:9:00～17:00(金曜日は20:00まで)

※4月17日(木)は10:00から

※入館は閉館30分前まで。

料 金:一般 800円(600円)

高・大学生 500円(300円)

中学生以下無料

※()内は前売・20名以上の団体

平山郁夫展とのセット券

2つの展示会のセット券を当館限定で販売!

販売期間:2月20日(木)～4月6日(日)

販売場所:広島県立美術館

料 金:一般 1,200円

※通常料金(両展の前売券合わせて)

1500円から300円引き



- ・JR広島駅より約1km
- ・広島城より約400m
- ・市内電車(「八丁堀」で乗り換え)白鳥線で「縮景園前」下車約20m
- ・ひろしまめいぶる～ぶバス「県立美術館前」下車



名勝「縮景園」とともに歩む アートの社
広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22 TEL (082)221-6246
http://www.hpam.jp/ FAX (082)223-1444

【展覧会概要】

現代日本画の最高峰、広島に集結！！

本展覧会では、現代の日本画界を牽引する四人の作家たち、下田義寛、竹内浩一、田淵俊夫、牧進が、「星星會展」を舞台に発表を重ねた意欲作約70点が一堂に会します。第1回展の星星會展は、2005(平成17)年に開催されました。その後2013年の第5回展まで、隔年で展覧会を開催。情性に流されぬよう第5回展の開催をもってその活動に終止符を打つことがあらかじめ決められていました。明確な目的意識を当初から持ち合わせていたことがわかります。相互に刺激し合い、毎回新たな創意を加えながら、屏風などの大作を含む新作を出品していったのです。

会派にこだわることなく日本画の新たな可能性を探る野心的な運動体としては、古くは福田平八郎、山口蓬春、中村岳陵らによって1930(昭和5)年に発足した「六潮会」があります。戦後においても、1959(昭和34)年に加山又造、横山操、石本正によって始まりその後平山郁夫も参加した「轟会」、のちに星星會の一員となる竹内浩一を含めた若手・中堅作家たちによって1984(昭和59)年に結成された「横の会」など、いくつもの例を挙げることができます。これらのグループ結成の背景には、所属団体内ではできない実験的な創作を行うことで作画上の行き詰まりを打破したい、という渴望がありました。

星星會については、日本画壇の中ですでに大家の域に達していた4名の画家が、決して自らの状況に安住せず、これまで積み重ねてきた画境をさらに深化させるため、いわば挑戦者のスタンスで創作に臨みました。「横の会」は、メンバー間でしばしば激しく意見をぶつけ合う緊張感に満ちた場だったようですが、星星會は、展覧会ごとに意見交換を行いながらも各作家の世界を尊重し、同志の仕事を身近に感じつつ自らの世界を冷静に掘り下げることのできる貴重な場でした。

本展覧会では、会の命名者である高山辰雄の代表作もあわせて紹介します。現代日本画の最高峰を心ゆくまでご鑑賞ください。



いずれも、星星會展札幌会場展示風景(北海道立近代美術館)

星星會展とは

星星會展は、2005(平成17)年に第1回を開催し、以降隔年で展覧会を開催。2013(平成25年)年の第5回展をもってその活動を終了したグループ展です。メンバーは下田義寛、竹内浩一、田淵俊夫、牧進の四氏で、自由な立場で創作活動に邁進し、新作の大作を中心に発表してきました。同世代の作家がその所属団体を越えて活動し、緊張感を持って新たな日本画の世界に挑戦する非常に意欲的な試みでした。

「星星會」と命名したのは、現代日本画の巨匠・高山辰雄で、「小さな星でも切磋琢磨によって大きな星として輝くようになる」ことを願ってこの名を付けた、とのことでした。

press release

【展覧会構成と内容】

下田義寛、竹内浩一、田淵俊夫、牧進の作品を、原則として星星會展の出品順に展示します。なお、会場に入って最初のスペースでは、高山辰雄の晩年の代表作1点を紹介します。

下田義寛

下田義寛のモチーフは一貫して自然です。第1回展では舞い飛ぶ鳥を三様にとらえた作品を発表。その背景処理には各々工夫が見られ、鮮やかな群青で水面を彷彿とさせたり、流れるような斜めの線を加えることで鳥の動きを暗示させたり、夕焼けに染まるがごとき空間が料紙装飾のようであったりと、実に多彩です。2回展以降は主に山岳風景を描き、森林や溪流などを組み合わせるなど工夫を重ねました。しばしば月や太陽が添えられることで、刻一刻と移り変わる光の表現がたくみに取り入れられています。

下田義寛 《聴春》



竹内浩一

竹内浩一は、抑制された色彩によって、動物の姿態を独自の視点でとらえています。膨張して身をくねらせる牛、顔貌が溶解しつつあるような馬など、敢えて形をくずすことで、自らの心象を動物の姿に仮託しているかのようです。一方で、写実表現を極限まで突き詰めた作品も同時に示されます。明らかな擬人化、不定形の文様が浮遊するような背景処理なども、しばしば見受けられます。繊細な筆致で植物を描いたもの、あるいは植物と動物との組み合わせも、過去の作例をさらに発展させるような形で出品されました。

竹内浩一 《花回る》



田淵俊夫

田淵俊夫は、第1回展で墨のみを用いた3作品を出品。以降第5回展まで、毎回アプローチを変えながら水墨画を1点加えることを欠かしていませんでした。同時に、岩絵具による華麗な色彩表現も試み、深閑とした大自然の景観、強い生命力を宿した草花、田園風景、都市風景など、その対象は実に幅広いものがあります。微視的なものと巨視的なものが入り混じり、自在に展開されているのです。水墨においては、作画に適した土佐麻紙を見出し、余白を生かした淡墨による表現を繰り返し模索しました。それはまた、色彩を用いての創作の参考ともなったようです。

田淵俊夫 《秋爛》



牧進

牧進は、いずれの作品にも季節の情感をにじませながら、花や鳥、魚などをモチーフとした作品を毎回出品しています。全体として、多色を用いて画面を装飾的に構築していく傾向が強く見られます。明快な線による形態把握と、強い色彩の対比。桜の花弁や河原の石などは、時に過剰なまでに画面を埋め尽くします。他方、対象を絞り込み余白を活かした表現においても独特の冴えを見せています。金・銀・プラチナや焼群青などを効果的に用いるための試行錯誤が、多くの作品に見出せます。鳥や花の姿を借りて人間の有り様を表すような作品も見出せます。



牧進 《闌》

4名による各回の出品作品を改めて振り返ると、星屋會の画家たちは2年毎の展覧会で、その都度意識的に新たな創意を加えていることがわかります。これまで築き上げてきた絵画世界をベースにしながら、さらなる飛躍を企図しているのです。日本の風土に根ざした精神性と高度な技術に裏打ちされた伝統を大切に守りながら、日本画の未来を見据えながら。今回の星屋會の回顧展は、継続的に発表されたそれらの作品群が一堂に会するまたとない機会です。現代日本画が到達した一つのスタンダードを確認できる場となることでしょう。

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail. keiko_yamamoto@nomurakougei.co.jp (山本宛)

担当 学芸課 山下寿水

事業推進課 山本恵子

press release

【主要作品解説】

下田義寛 《夕映》

下田義寛は星星會の第2回展以降、「孤峰」として強い存在感を示す富士山に惹かれ、川面や桜など他のモチーフとの組み合わせを行ないながら、繰り返し制作している。恩師である岩橋英遠が晩年に富士を多く描いており、その影響もあるという。本作品では、ちぎれ雲を描きたいという思いが強かった。他を圧するような迫力を持つ富士の姿を大きくとらえ、前面には自身の思いを映し込もうとの意図で群青を塗り込めた。



下田義寛 《夕映》

田淵俊夫 《刻》

「心を動かされたものしか絵にできない」「感動さえあれば、身の回りのもの全てが作画の対象となる」と田淵俊夫は言う。本作品は、新宿にあるビルのレストランで夫人と食事をしている時、ふと窓を見ると満月が浮かんでおり、その情景が強く画家の心をとらえたことから生まれた。とっさに手元にあった紙片に簡単なスケッチをし、あとはアトリエで想像を交えながら仕上げたという。画面全体に広がる群青の発色が実に美しい。



田淵俊夫 《刻》

竹内浩一 《はな》

愛媛県立とべ動物園のインドゾウ「ハナ子」の写生に基づく作品。しかし、題名の「はな」は必ずしもこのゾウの名ということではなく、音の響きの心地よさなど、自由に解釈してほしいと作者は言う。淡い色彩を重ねて複雑な絵肌をつくり、ところどころ不定形な模様を画面に散りばめている。前足をあげて体をもちあげたような姿勢には浮遊感が漂い、作者の心象を映し込んでいるかのようである。



竹内浩一 《はな》

牧進 《驟雨》

雨に濡れる黄菖蒲が、水墨によって表されている。あえて和紙の裏側を使い、ざらついた質感を意図的に出した。また、墨には黒チタンを混ぜ、独特の質感表現を試みたという。金属の定規の端に雲母（きら）を塗り、それを画面に押し当てて、雨を線で表現。師の川端龍子も用いていた手法である。顔料の付き具合や、配置のバランスなど、やり直しがきかないが、偶然おもしろい効果が生まれることもあり、緊張感に満ちた画面となっている。



牧進 《驟雨》

【関連イベント】

記念講演会(広島県立美術館友の会共催)

演題:「日本画の伝統と未来」

講師:田淵俊夫(日本画家、日本美術院代表理事)

日時:4月27日(日)13:30~(開場13:00)

場所:地階講堂

※聴講無料。申込不要(先着200名)

ワークショップ(平山郁夫展との共同企画)

①日本画の画材で塗り絵をしよう!

講師:廣藤良樹(日本画家、日本美術院院友)

日時:5月6日(火・振休)13:30~

場所:3階ロビー

対象:小・中学生(保護者同伴可)

定員:5名

※参加無料、要事前申込

※小学生の方には必ず保護者の方の付添をお願いいたします。

②日本画の画材でブックカバーをつくろう!

講師:廣藤良樹(日本画家、日本美術院院友)

日時:5月11日(日)13:30~

場所:3階ロビー

対象:一般(高校生以上)

定員:10名

参加料(材料費)500円

※要事前申込

ワークショップ申込方法

申込方法:ワークショップ名、参加者・保護者のお名前、年齢(こどものみ)、電話番号を添えて、お電話にてお申込みください。 広島県立美術館 Tel:082-221-6246

ギャラリートーク

日時:4月18日(金)、4月25日(金)、5月2日(金)、5月9日(金)、5月16日(金) 15:00~/18:00~

場所:2階展示室

※入館券が必要です。申込不要。

ウェブ・レポーター大募集

インターネットで情報発信をされている方に星星會展をご鑑賞いただき、その素敵な感想をインターネットを通じて、情報発信していただきます。もちろん、ウェブ・レポーターとして当日ご参加いただく方は、無料で星星會展をご鑑賞いただけます。

日時:4月18日(金)17:00~19:30

受付場所:2階ロビー

実施場所:2階展示室内

対象:ホームページ、ブログ、ツイッター、フェイスブックなどで情報発信をされている一般の方

特典:実施当日限り、星星會展にご招待

ロビーコンサート

日時:会期中の毎週土曜日 12:00~

場所:1階ロビー

